

No. J2112

戦後日本社会の国民再編成過程における「引揚者」の主体形成のポリティクス—満洲からの「引揚者」を中心に—

名古屋大学人文学研究科 博士後期課程

劉 コウ

1. 研究の目的：

本研究は法制度・社会的言説・個人的実践という三つのレベルにおける語られ方に着目し、戦後日本における国民再編成の中で、「引揚者」という社会的カテゴリーがいかに関形成されたのか、すなわち「引揚者」の主体構築のプロセスを考察するものである。

2. 調査の内容：

新型コロナウイルス感染症の拡大により、2021年の研究活動は主に資料収集を中心に行われた。資料の収集先は国立国会図書館（東京）、国立公文書館とつくば分館（東京・茨城県）、東京大学経済学図書館（東京）、学習院大学東洋文化研究所「友邦文庫」、愛知大学「簡斎文庫」「霞山文庫」、滋賀大学経済経営研究所「満洲引揚資料」、東海三県の県立図書館、名古屋市立図書館、土岐市図書館などである。また、名古屋大学中央図書館のIILサービス（図書館間の資料相互利用）をも利用した。行政公文書のほか、引揚者団体内部の一次史料を収集した。2022年ポストコロナウイルス時期へ徐々に移行していくなかで、県をまたぐ移動の制限が緩和されたこともあり、従来のフィールド地である引揚関連の記念館や博物館への調査が可能となった。要するに、2022年主に記念館や博物館という記憶空間について調査を進めた。具体的に博多引揚記念碑、佐世保浦頭引揚資料館、二日市保養所旧跡（引揚女性の中絶施設）、長野県満蒙開拓平和祈念館/飯田歴史研究所、舞鶴引揚記念館、仙台戦災復興記念館などに見学し資料収集をした。また、引揚体験という戦争体験を日本全体の戦争体験のなかでどのように位置付けられているのかを把握・確認するために、補助線として靖国神社境内にある遊就館、しょうけい館、昭和館などにも行った。

以上の資料に基づいて、主に①行政上における引揚者の位置づけ、と②それに対する引揚者本人の反応という二つのベクトルから分析を進めていった。

3 助成期間中の成果

学会発表3件

2021年4月26日「戦後日本における国民の再統合」戦争社会学会 オンライン

2021年8月26日 「引揚経験の競合」国際ワークショップ「東アジアを移動する人々——20世紀国民史の脱構築と記録文化」日文研

2022年6月26日「引揚者団体全国連合会の活動および戦争体験の語り」移民学会 京大

査読論文1本「戦後日本社会における引揚者の犠牲物語の形成」『日中社会学』(30)